

背後の自然：『ウォールデン』再読

高橋，勤
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1800851>

出版情報：英語英文学論叢. 67, pp.1-18, 2017-03-17. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

背後の自然 — 『ウォールデン』再読

高橋 勤

1. ウォールデンの森に木はあるのか

アイルランドの詩人 W.B. イエイツに「イニスフリー孤島」という詩がある。詩人は都会の街中で、イニスフリー湖に浮かぶ孤島の生活を夢見ている。そこで小さな小屋を立て、ひとり暮らしの生活を始める。豆畑を作り、蜜蜂を飼う。湖の波音を聴きながら、静けさと安らぎが心を支配するのを感じている……。『20世紀批評集「ウォールデン」』を編集したシャーマン・ポールは、このイエイツの詩を『批評集』の巻頭に掲載したのだが、そこには編者ポールの『ウォールデン』をめぐる暗黙の前提が示されていた。

ひとつには『ウォールデン』がパストラル文学の系譜において捉えられ、田園詩、自然を基本とするシンプルライフの実践の書と考えられたことである。もうひとつの批評的前提は、この論集が編纂された1950年代の批評論ニュークリティシズムの方法論に大きく依拠している点である。こうして『ウォールデン』の作品世界は1840-50年代の合衆国の歴史状況から切り離され、統一された美の空間、もしくは詩人の心理的空間の表現とみなされたのである。『ウォールデン』が世界各国に受容され、異なる文脈に置き換えられて論じられ比較された背景には、こうした文学のジャンル性、その普遍的価値を強調する方法論があったと思われる。

このように従来『ウォールデン』はしばしばパストラル文学、シンプルライフ実践の書とされた訳だが、ここで少々唐突だが、「ウォールデンの森に木はあるのか」という問いをこの作品に投げかけることで、作品の歴史的背景と創作過程に光を当ててみたいと思うのである。「森の生活」という副題からしても、われわれは豊かな森に囲まれた湖畔の風景を想像しがちである。しかしソローがひとり暮らしを始めた1845年当時、コンコード周辺の森林の占有率は10パーセント程度であったと言われており、実際ウォールデン湖畔の土地もワイマンという農夫によって切り開かれた場所であったのである。ソロー協会の支援を得て2006年に

作成された当時の地図を見ても、ソローの小屋の周辺に豊かな森林は広がってはいないのである。

コンコードの歴史家バークスデイル・メイナードによると、

He [Thoreau] subtitled his book *Life in the Woods*, but this was no primeval forest. Walden Woods as a whole retained only a semiwild character after generations of cutting. Thoreau lived not far from its northern edge and between the highway and the train tracks, both of which were visible from his door. *Life in the Woods?*—actually, it was life on a tract cut over by Wyman, a stump-strewn area larger than eight football fields surrounded by a larger, patchwork forest. In 1845, it was “about 15 years since the land was cleared,” and in fact the whole Wyman Lot had been cut over at least that early. (Maynard 74)

子どもの頃ソローと野山を歩いた経験もあるルイザ・メイ・オルコットはソローの小屋のスケッチを二枚残しており、そのいずれも小屋の描写は豊かな緑に包まれている (Meltzer and Harding 145-46)。実際には二次林が漸く生長しかけた状態の土地の風景を豊かな森に変貌させたのはオルコットのノスタルジアをこめた想像力であったろうが、私はむしろ『ウォールデン』という作品の中に豊かな森の連想を誘う描写が存在するのではないかと考える。つまりソローは眼前には存在しない豊かな森の風景を『ウォールデン』に描き込もうとしたのである。

たとえば、ソロー自身が書いた小屋周辺の風景描写はどうであろうか。

I was seated by the shore of a small pond, about a mile and a half south of the village of Concord and somewhat higher than it, in the midst of an extensive wood between that town and Lincoln, ... but *I was so low in the woods that the opposite shore, half a mile off, like the rest, covered with wood, was my most distant horizon. For the first week, whenever I looked out on the pond it impressed me like a tarn high up on the side of a mountain, its bottom far above the surface of other lakes* (W86, イタリクス筆者)

あるいは、その直前に書かれた小屋の描写である。

To my imagination it retained throughout the day more or less of this aural character, *reminding me of a certain house on a mountain which I had visited the year before*. This was an airy and unplastered cabin fit to entertain a traveling god, and where a goddess might trail her garments. *The winds which passed over my dwelling were such as sweep over the ridges of mountains, bearing the broken strains, or celestial parts only, of terrestrial music.* (W86, イタリクス筆者)

「山上湖」にしても、また山の上の小屋の連想にしても、ソローが自らの小屋の住まいを豊かな自然のなかに位置づけようとしていることは明らかである。さらに、「音」という章の末尾に描かれた次の一節は、ソローの位置する自然と文明社会との距離の隔たりをさらに印象づけるものであったのである。

I kept neither dog, cat, cow, pig, nor hens, so that you would have said there was a deficiency of domestic sounds; ... *No cockerels to crow nor hens to cackle in the yard. No yard! but unfenced Nature reaching up to your very sills In stead of no path to the front-yard gate in the Great Snow, —no gate, —no front-yard, —and no path to the civilized world!* (W127-28, イタリクス筆者)

ソロー自身が書いているとおり、ウォールデン湖はコンコードの村から1.5マイルしか離れておらず、「文明社会に通じる小道」が存在しないどころか、ウォールデン湖のすぐ裏にはフィッチバーグ鉄道が走っていた。こうした記述を事実と反する矛盾あるいは脚色と捉えるのではなく、むしろ記述の齟齬のなかにウォールデン体験の意義とソローの意図が明確に示されたと考えたいのである。私が「ウォールデンの森に木はあるのか」といういささか唐突な質問で浮かび上がらせたかったのは、『ウォールデン』というテキストの自然の表象は「眼前の」自然風景ではなく、ソローが当時最も関心を寄せた「背後の自然」に大きく左右された事実を示すことであったのである。

2. 「背後の自然」とはなにか

それではソローが最も関心を寄せた「背後の自然」とは何だったのか。私はそれを「野生の思想」と呼びたいと思う。『ウォールデン』というテキストは文明生活から切り離されたパストラル思想、シンプル・ライフの書などではなく、より積極的に「野生の思想」を追究し、それに貫かれたテキストであったと考えるのである。

かつて私は『メインの森』と『コッド岬』をウォールデン湖から伸びた二つの支流とみなし、ウォールデン体験の延長線上において考察したが（高橋132）、むしろ『ウォールデン』というテキストにはメインの森とコッド岬の体験が混入し、複雑に交錯したと考えることはできないだろうか。なぜなら『ウォールデン』の執筆期間はメインの森やコッド岬への旅の時期とほぼ重なっていたからである。『ウォールデン』というテキストには、ソローが実際にウォールデン湖畔で体験した自然の事実ばかりか、さらに野生的な「背後の自然」とその省察が同時に織り込まれたと考えたいのである。

ソローがウォールデン滞在中から、メインの森へ旅に出たことはよく知られた事実である。1846年にはじめてメインの森の探索旅行に出るが、49年にはさらにコッド岬に徒歩旅行している。50年の1月にはコッド岬の旅について講演し、さらに6月にはふたたびコッド岬を訪ねている。53年にはメインの森に二度目の旅に出かけてもいる。

さらに、野生論の展開に関連して見逃せないのが、アメリカ先住民、つまりインディアンへの深い関心であった。ソローは若い頃からコンコードの先住民アルゴンキン族やその遺跡に深い関心を抱いていたが、先住民史への包括的な知識欲が高まったのが1850年前後であったのである。ソローは生涯12冊50万語におよぶ「インディアン・ノートブック」を残し、当代有数の知識を有していたと云われている。その最初の一冊が書き込まれたのが49年であり、51年から52年にかけて最も夥しい量の記述がノートブックに書き込まれたのである。『ウォールデン』、『メインの森』、『コッド岬』に断片的に記された先住民への言及は、こうした膨大な知識の蓄積のなかから記されたものであり、文明社会と対比された「野生の思考」の具体例として挙げられたものであったのである。

周知のとおり、『ウォールデン』というテキストは1845年からほぼ二年にわたるウォールデン湖畔での体験を描いた作品だが、9年間の推敲

をかさねて完成し、1854年8月に刊行されている。その創作過程を詳細に分析したリンク・ジョンソンの調査によると、51年から52年にかけて大幅な加筆と改稿が行われ、特に後半の章「湖」「より高い法則」「動物の隣人たち」等の大半が書き加えられたと説明される (Shanley 67)。つまり50年代のはじめソローにおいて野生論が最も深化した時期に『ウォールデン』は改稿され完成したのである。

ソローは1851年4月23日、コンコード・ライシウムにおいて「野生」(“The Wild”)という講演を行っている。以後この講演は8回にわたってくり返され、ソローが最も愛着を寄せた講演テーマのひとつであったが、その核心ともいえる主張が49年9月、コッド岬への二度目の旅の途中に記されている。

How near to good is what is wild. There is the marrow of nature—there her divine liquors—that is the wine I love.—A man’s health requires as many acres of meadow as his farm does loads of muck. They are indispensable both to men & corn. There are the only strong meats—We pine & starve and lose spirit on the thin gruel of society. A town is saved not by any righteous men in it but by the woods & swamps that surround it. (PJ3: 27)

ここに記された「野生的なものは善なるものと隣接している」という表現は、『ウォールデン』「より高い法則」に記された「善なるものと同様に野生的なものを私は愛する」(W210)という言葉を想起させないだろうか。

ソローの野生論がメインの森やコッド岬への冒険旅行によって肉づけされたことは事実であろう。また50年代はじめにおける野生論への傾斜が『ウォールデン』における自然描写の「背後」にあったと考えることも奇想とは言えない。しかし他方において、原生自然に分け入る旅の経験や先住民との接触の延長線上において『ウォールデン』が創作されたとは考えにくいのである。事実『ウォールデン』における野生に関する言及、あるいは先住民に関する引用の大半は、すでにウォールデン滞在中に記された「ウォールデン」第1校、「プロト・ウォールデン」の中に記されていたのである (Shanley, “First Version of Walden”)。

むしろ野生論と『ウォールデン』との関連性は、ソローが1840年代中

盤、いやそれ以前にウォールデン湖畔のひとり暮らしを構想した、その詩的ヴィジョンのなかに存在したとは考えられないだろうか。ウォールデン湖畔に小屋を建てひとり暮らしをするという構想と、ソローのなかに醸成されていた野生論が密接に関連していたのである。イエイツはイニスフリーという架空の孤島によって現実社会から切り離されたパストラルの空間を創造した。それは刹那的な逃避衝動でもあったのだが、ソローがウォールデン湖畔で構想したのは、より現実的な生活の実験であり、それはフロンティアの生活の実践ともいえるものであった。開拓民の暮らしを理想としたというのではなく、比喩的な意味合いにおいて、より野生的な自然と文明社会の接点に身を置く「境界の生活」の実践であったということである。

ソローはこの自然と文明の接点の意味合いを「直面する」(front)という言葉で表現している。周知のとおり、ウォールデン湖畔の生活の目的についてソローは「本質的な事実直面すること」だと述べたが、それはより本質的な自然、つまり野生的な自然に直面するフロンティアの実践であったはずである。ウォールデン湖畔滞在中に執筆された『コンコード川とメリマック川の一週間』には、つぎのような描写がある。

The frontiers are not east or west, north or south, but wherever a man fronts a fact, though that fact be his neighbor, there is an unsettled wilderness between him and Canada, between him and the setting sun, or, farther still, between him and it. Let him build himself a log-house with the bark on where he is, fronting IT, and wage there an Old French war for seven or seventy years, with Indians and Rangers, or whatever else may come between him and the reality, and save his scalp if he can. (*Week* 304)

あきらかにソローはウォールデン湖畔の小屋をフロンティアの「丸太小屋」と重ね合わせていたのである。さらにさかのぼること二年、ソローはニューヨーク・スタテン島に滞在中に、ウォールデンの小屋の建設を予告するような記述を日記に書き入れていた。ソローは「理想的で、真の自然というものがある。理想的な生活というものがあるように、実際の自然よりもはるかに完全な自然というものがあると信じる」と書き出し、「理想の地でなければ情熱を傾けて小屋を建てそこで暮らそうと考

える者などいるだろうか」(PJ 1: 481)と語っている。「実際の自然よりもはるかに完全な自然」、すなわち「背後の自然」の探求こそ野生論において展開されたことであり、その「理想の地」としてウォールデンの森が構想され、再創造されたと考えられるのである。

3. 野生論の水脈

ソローは「野生」という概念、その思想的契機をいつ頃から、いかなる影響によって見出していたのだろうか。40年代後半に記された「プロト・ウォールデン」にはすでに野生論の核心とも言える「善なるものと同様に野生的なものを私は愛する」(W210)という一節があり、ソローがウォールデン体験時においてすでに野生という概念を基軸とした自然の省察を深めていたことが推察されるのである。

ソローの野生論が「思想」として形成されたのが1850年前後であったとすれば、その発端、つまり野生の問題が自覚的に探求されたのはそれから10年程前の1840年前後であった、と私は考えている。より正確に言うと、41年に野生に対する関心が一気に深まったと考えられる。というのも41年の日記に野生に関する言及、あるいはソローの野生論「ウォーキング」の文章を想起させる断片的記述が散見されるからである。

従来のソロー研究において、ハーヴァード卒業後の数年間、40年前後のソローの動向において野生論が研究の対象とされることはなかったように思われる。むしろ研究者の関心はエマソンとの交友関係、超絶主義クラブへの参加と『ダイアル』への投稿、コンコード・アカデミーの創設と教師体験、あるいはエレン・シーウォルへの恋慕等に向けられてきたのである。しかしソローはエマソンとの交流を深め、その超絶主義思想に感化される一方で、確実にその生涯を貫く野生の思想に傾斜し始めていたのである。たとえば1841年4月26日の日記では、インディアンの野外生活の自由と文明社会における家の習慣を対比的に描き出し、「気ままに歩く (saunter) のは偉大なアートである」(PJ 1: 304)という、「ウォーキング」の冒頭を想起させる一節が書かれている。その一月後5月23日の日記では、「われわれの孤独で冴えた思想には、大地は未だ探索されぬ荒野である。カケスやジャコウネズミ等の野生が自然に大きく君臨している」(PJ 1: 310)とあり、「野生」という言葉が意識的に用いられた最も初期の例であった。さらに12月15日の日記には「私は書物の

中よりも岩に生えた地衣類により深く親近性を覚えるようだ。私の性質は特に野生的であり、あらゆる野生に強く惹かれる気がする」(PJ 1: 344) という記述も見られる。ルーシー・ブラウンに宛てられた7月21日付の書簡には、以下のような記述が見られるのである。

I grow savafer and savafer every day, as if fed on raw meat, and my tame-ness is only the repose of untamableness. I dream of looking abroad summer and winter, with free gaze, from some mountain-side, while my nature with such easy sympathy as the blue-eyed grass in the meadow looks in the face of the sky. (Harding and Bode 45)

「生肉を糧」とするという表現が、『ウォールデン』『より高い法則』の冒頭に描かれた、ウッドチャックを生そのまま貪り喰いたいという野生的な衝動と呼応していることは言うまでもない。

ソローは1843年5月から12月までの半年間、ニューヨークのスタテン島に滞在する。表向きの目的は、エマソンの兄ウィリアム・エマソン家の家庭教師を務めることであったが、実際には長引く体調不良のための転地療養と、ニューヨークの出版社との折衝という隠された目的があったと言われている。

43年の時点において、ソローはどのような作品の出版計画をもっていたのだろうか。『ウォールデン』や『コンコード川とメリマック川の一週間』の構想はいまだ成っておらず、おそらくはハーヴァード卒業後に書きため、一部を超絶クラブの機関誌『ダイヤル』に投稿したエッセイや詩の出版を考えていたのであろう。そうしたエッセイのひとつに「プロト・ウォーキング」ともいえる野生論の原形が含まれていたと考えられないか。というのも、41年に日記にしたためた野生の断想を、ソローは42年に再構成し、エッセイとしてまとめる作業を行っていたからである。出版社との折衝は失敗に終わったと言われているが、そのかたわらソローは商工会議所の図書館に足しげく通い、ホメロスやウエルギリウス、スコットランドの吟遊詩人オシアン、英国の詩人チョーサー、スペンサー、シェイクスピア等を濫読し、詩的言語における自然性の問題について考察を深めている。つまり、「ウォーキング」に示された野生の文学論の原形が、この時期に形成されたと考えられるのである。

ニューヨーク滞在中も終わりに近づいた43年11月29日、ソローはコンコード・ライシウムで「ホメロス・オシアン・チョーサー」という講演を行っており、そこには「ウォーキング」の野生論と重なる主張が散見される。この講演において一貫して示されたのは古典と自然の同一性であった。詩は「自然の果実」であり、「樾がドングリを、ツル植物がヒョウタンをつけるのと同様に、人間は詩を実らせる」のであり、「詩人は自然のように穏やかで……あたかも自然そのものが語っているかのようなのだ」(Moldenhauer and Moser 154-55)。たとえばホメロス『イーリアス』も自由と気ままさに充ちており、その読後感には「あたかもわが故郷の大地を踏みしめ、土地の先住民となったような」気分させられるものであった(164)。

ソローは「ウォーキング」において「文学の中で私を魅了するのは野生的なものだけである」(“Walking” 79)と語り、ギリシア神話と英国の詩を比較して前者を賞賛する。その理由として、英国の詩では「詩人が室内に入ってしまったのだ」と嘆くのだが、43年の講演においても同様の主張がみられるのである。ソローはホメロスやオシアンの英雄詩(叙事詩)を賞賛し、自然体験の違いが詩に用いられた言語の質や想像力の構想に大きな変化をもたらし、その野生的な荒々しさと尊厳を喪失するとともに文学ジャンルを細分化させたと嘆くのである。

The bard has lost the dignity and sacredness of his office When we come to the pleasant English verse, it seems as if the storms had all cleared away, and it would never thunder and lighten more. The poet has come within doors, and exchanged the forest and crag for the fireside The towering and misty imagination of the bard has descended into the plain, and become a lowlander, and keeps flocks and herds. Poetry is one man's trade, and not all men's religion, and is split into many styles. It is pastoral, and lyric, and narrative, and didactic. (Moldenhauer and Moser 162-63)

1841年に思想的契機を見出したソローの野生論は43年のニューヨーク体験を通して文化論、文学論へと展開されたのである。

エマソンの勧めに応じてソローがジャーナルを書きはじめたのは1837年であり、それ以前のソローの思想形成については大きく推論に委

ねられる。野生論の水脈を遡ろうとするわれわれの試みははやくも行く手を阻まれた形だが、それでもハーヴァードの友人関係、読書歴、あるいは残存する在学中のレポートからソローにおける野生論への傾斜を推察することができる。

ソローがハーヴァードに在学したのは1832年から37年、16歳から20歳の時期であった。おもに専攻したのは古典語（ギリシア語、ラテン語）と現代語（フランス語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語）さらに数学、および自然哲学（光学、天文学等）であり、これまでナチュラル・ヒストリーに対する関心はソローの人生の後半、すなわち1850年以降に急速に高まったと考えられてきた。しかし他方において、ソローは入学一年目から多数の探検記、冒険旅行記を図書館から借り出し、貪るように読んでいたのである。アーヴィング『コロンブス航海記』『グレナダ征服記』、コックレーン『コロンビア旅行記』、ホール『カナダ・アメリカ旅行記』、コックス『コロンビア川の冒険』、ブロック『メキシコ旅行記』、マーシャル『北アメリカ植民史』、あるいは『難破船の書』等がそれぞれあり、特に野生論の形成に関連して言えば、シガニィ『アメリカ原住民の特徴』を借り出していることが注目に値する（Borst 10-25）。

当時のハーヴァードには冒険生活を求め、先住民文化に積極的に接触しようとする時代の空気のようなものが存在したのも事実であった。入学時ソローのルームメイトであったチャールズ・S・ウィーラーはコンコードの隣村リンカンの出身だが、37年ウォールデンの東フリンツ湖畔に小屋を建て、ソローとともに一夏を過ごしている（Harding 49）。コンコードにはまた名門ホア家の変り種、エドワード・ホアがいた。ソローとエドワードが44年の早春キャンプの火の不始末から山火事を引き起こしたことは有名な話だが、エドワードはのちにソローの3度目のメイン旅行に同行し、先住民ガイドジョー・ポリスと寝食を共にしていた。さらにソローのハーヴァードの同級には、のちに探検家、先住民研究者となったホレイショ・ヘイルという学生がいた（Harding 39）。ヘイルは入学2年目にしてアルゴンキン族の語彙に関するエッセイを発表して周囲を驚かせたが、さらに在学中にチャールズ・ウィルクス率いる合衆国探検隊に推挙されている。卒業後は南アメリカ、オーストラリア、ポリネシア、オレゴン等に向かう探検隊に加わり、46年、すなわちソローのウォールデン滞在中に『民俗学とフィロロジー』という図書を刊

行する。ヘイルはまさに、ソロー自身が夢に描きながら病のために断念せざるをえなかった人生を実現した人物だったのである。

ソローは卒業間際の37年6月2日に「文明社会の野蛮性」というレポートを提出している。このエッセイには「野生」に関する直接的な言及はないが、理想化されたインディアン像を通して自然生活崇拜の姿勢が示された。冒頭において「人生の目的は教育である」(Moldenhauer and Moser 108)と書き出し、教育は個人の内なるものを引き出すプロセスだが、それは「人の技に任せるよりも、自然の力に委ねたほうがいい」(110)と主張する。「文名人は物質の奴隷に過ぎず」(108)「わがインディアンは都会の住人よりもずっと人間らしい」(110)という指摘は、「ウォーキング」の野生論へと確実に引き継がれてゆく。

また「ウォーキング」では、人間の文化的な営みが発生学的に捉えられ、きわめて決定論的な要素が顕著だが、このハーヴァード・エッセイにもそうした思考の原形が見られ、自然風土の決定的な影響力が示唆されている。人間の精神は周囲の自然と同調し、魂は順応する。「そうして人間の構想は自然の山々と同様に壮大なものとなるのである」(109)。野蛮人の目は「詩人の目のように」「遠く未来を見据え、「かれの人生そのものが実践的な詩であり、完全な叙事詩なのである」(110)。

このハーヴァード・エッセイと「ウォーキング」における野生論との相違点は、このエッセイにおいては先住民が極度に理想化されており、それと併行して文明と自然が二元的に捉えられていることである。「ウォーキング」では、文明や文化の基盤、その基層としての自然の意義が問題とされたのに対し、ハーヴァード・エッセイでは「高貴な野蛮人」という、ヨーロッパに由来するロマンティックな言説がそのまま踏襲されたのが特徴である。

4. 『ウォールデン』における野生願望

さて『ウォールデン』においてこうした野生の思想が、「背後の自然」として、いかに反映されているか見てみよう。周知のとおり、『ウォールデン』において野生に関する言及は随所にあり、それはかならずしも新たな視点というわけではない。「ベイカー農場」という章に記された「何事にも煩わされずに夜明け前に起き出し、冒険を求めよ……そしておのが性質のままに野生的であれ」(W 207)という主張。あるいは「より高

い法則」に書かれた「善なるものと同様に野生的なものを私は愛する」(W 210) という主張もまた然りである。しかし他方において、ソローは自然の本質を野生という概念によって深化させながら、それを必ずしも人間の精神性にたいして二元論的に捉えてはいない。むしろ野生という概念と対比されたのは「家の習慣」、つまりドメスティック・イデオロギーに支えられた因習、そして商業主義を基盤とした浅薄な文化的洗練であった。ソローにとって重要であったのは、野生への回帰ではなく、内なる自然、野生の回復であったのである。

野生の回復という視点からみると、『ウォールデン』では詩人のペルソナばかりではなく、様々な動植物が野生的な自然を回復する過程が描かれている。その典型的な例が家畜である。つまり家畜化され自由を奪われた動物が、時として本性に目覚め、内なる野生を回復するというモチーフである。先に引いた「音」の引用では、「私はイヌ、ネコ、牛、豚、ニワトリを飼っておらず、家庭的な（ドメスティックな）音は存在しなかった」(W 127-28) という主旨の記述があるが、それになぞらえて言えば、こうした家畜が野生化する描写が散見されるのである。たとえばイヌについて言えば、「より高い法則」の冒頭でソロー自身が「なかば飢えた野犬のように」森をさまよったという記述 (W 210) があり、ネコについては「羽をもった」野ネコの噂話が言及されている (W 232)。乳搾りの時期の雌牛は野生のバッファロー以上に「度を超えている」(extravagant) という記述 (W 324) も見られるし、ニワトリは本来「インディアンのキジ」であったとされ、この「野生の雄鶏」は「先住民よりも土着」の生き物であったと書かれている (W 127)。『ウォールデン』のテキストにおいて、家畜が次から次へと野生化していくのである。

いや野生化していくのは家畜や動物ばかりではない。たとえば、ソローの小屋の家具も同様である。早朝、小屋の掃除のために戸外に出された家具は、木立のなかでその自然性を回復しているように思えるのである。イスやテーブルやベッドは「外に出られたのを喜んでいるようであり、あたかも中に入れられるのを欲していないよう」であった (W 113)。

It was worth the while to see the sun shine on these things, and hear he free wind blow on them; so much more interesting most familiar objects look out of doors than in the house. A bird sits on the next bough, life-everlast-

ing grows under the table, and blackberry vines run round its legs; pine cones, chestnut burs, and strawberry leaves are strewn about. It looked as if these was the way these forms came to be transferred to our furniture, to tables, chairs, and bedsteads, —because they once stood in their midst.
(*W* 113)

野生の回復というテーマは「ベイカー農場」に述べられた「おのが性質のままに野生的であれ」という言葉に集約されるのだが、ここで明らかなのは、野生という概念はけっして文明や精神性と対比的に捉えられた概念ではなく、むしろ家庭性（ドメスティックなもの）に象徴される文明社会の因習や束縛、その不合理さと脆弱さを補うための思考であったということである。

ソローの野生願望を考える際にわれわれが注意すべきことは、それが自然回帰という一方通行的なものではないということである。少なくとも、『ウォールデン』に特徴的なのは、自然と文明社会を気ままに行き来する〈ソローの揺れ〉である。自然と文明という、二つの境界を自在に揺れ動くソローの姿勢は『ウォールデン』の構成に明確に示されている。「読書」という章で活字の文化について述べたソローは、つづく「音」という章では活字にされない自然の音の世界を描き、「孤独」という章の直後には「訪問者たち」が配置されている。「豆畑」と「湖」の間には「村」という章が挿入され、「より高い法則」において崇高な精神性を論じたソローは、次章「動物の隣人たち」では虫や動物について愛着を込めて描写している。

ここで「読書」から「音」の章にいたるシークエンスについて、より詳細に論じてみよう。これらの章を従来のように自然と文明という二項対立的な枠組みで捉えるのではなく、ソローの野生願望という一貫した、通底するテーマの観点から論じてみたいと思うのである。

「読書」の章でおもに語られるのは古典の卓越性である。19世紀の実用書あるいは大衆小説にたいして、ホメロス、アイスキュロス、ウェルギリウスといった、古代ギリシア・ローマの「英雄文学」の重要性が論じられるのである。古典の普遍性、その永遠性が賞賛されたのだが、われわれはこうした指摘をすぐさまソローの教養主義と結びつけて考える傾向がある。たしかに古典は「もっとも素晴らしい遺産」(*W* 102)と言

及され、そうした文明の粋にたいすと「自然など古くさく、省略することもできる」(W100)という指摘からも、文明対自然という構図で捉えがちである。

しかし実際にソローが主張しているのは、古典文学の現実性であり自然性であったように思われる。ギリシア・ローマの叙事詩あるいは悲劇が描き出したものは、より野生的な自然と、より生々しい人間のドラマであり、言ってみれば、それは理想化された自然と人間の生き様と葛藤であったと言える。いわば「自然など古くさく、省略することもできる」という指摘は、古典がいかにも理想的に、かつ典型的に自然を描き出したか、その証でもあったのである。

A written word is the choicest of relics. It is something at once more intimate with us and more universal than any other work of art. It is the work of art nearest to life itself. It may be translated into every language, and not only be read but actually breathed from all human lips; —not be represented on canvas or in marble only, but be carved out of the breath of life itself. A symbol of an ancient man's thought becomes a modern man's speech.
(W 102)

この一節で特に注目すべき言葉は「象徴」であろう。それは「人生そのものに最も近い」という形容によって示されるのだが、古典文学の普遍性は単なる抽象的な思考ではなく、その意味は生身の現実性に内包されていたのである。上岡克己は、この「読書」の章に関して、「自然と同じ役割を書物にもたせようとした」(上岡98)と興味深い分析を行っているが、文字が単なる記号ではなく、自然の原質を有する「象徴」であるという、ソローの主張を見事に看破していたのである。古典は「朝そのもののように美しい」(W103)ものであったのである。

ここで想起すべきことは、「ウォーキング」においてソローがギリシア・ローマの古典文学と英文学を比較し、「野生」という概念を中心として古典文学を擁護していたことである。ソローは「文学において、われわれを惹きつけるのは野生的なものだけである」と述べた後で、「本当に良い本というのは、西部の大草原や東部の大森林のなかで見出された野生の花のように自然で、思いがけなく、また言葉に表せないほど美しく、

完全である」(“Walking” 80)と語っていた。さらにソローは「英文学に比べると、ギリシア神話はどれほど豊かな自然に根ざしていることだろうか」(81)とも述べているが、そこに古典文学が「朝そのもののように美しい」と語った『ウォールデン』の語り手を想起することは難しいことではない。

古典の中の自然性、あるいは言語のもつ比喩の象徴性をソローは問題にしたのだが、そうした観点からすると、「読書」から「音」への移行はむしろ必然的な成り行きであったように思われる。「音」の章の冒頭、ソローは文字から音への移行について、次のように説明している。

But while we are confined to books, though the most select and classic, and read only particular written languages, which are themselves but dialects and provincial, we are in danger of forgetting the language which all things and events speak without metaphor, which alone is copious and standard. Much is published, but little printed. The rays which stream through the shutter will be no longer remembered when the shutter is wholly removed. (W 111)

この一節についてはアメリカの研究者の間においても解釈が一致していない。特に最後の鎧戸(シャッター)の記述については十分な説明がなされていないのが実状である。しかし19世紀前半の状況を考えると、この描写は自明ではないだろうか。つまり読書というものが多くの場合窓際で行われていたという事情である。鎧戸から差し込む光を頼りに本を読む者たちは、戸外に出た途端に光のことは忘れてしまうという意味である。むしろここには比喩的な意味が含まれている。つまりどんなに優れた古典であろうとも、それは一地方の言語つまり「比喩」で書かれたものでしかなく、読書という行為はそこから「差し込む光」を読み解く行為である。それに対して、自然の音は唯一の「比喩なしで語られる言語」であり、文字という「鎧戸」が取り払われた瞬間、自然の音や光景に注目し、それを読み取ろうとする人はいない、という皮肉が込められたのである。

この一節がなぜ野生願望を考えるうえで示唆的なのかというと、自然の音にしてもまた言語という「比喩」によって書かれた文学にしても、

ソローが追求したものは自然の原質を豊かに伴う現実性（リアリティ）であったからである。

周知のとおり、「音」という章は鉄道や教会の鐘という文明社会の音から、より野生的な自然の音へと進行していく。それも自然と文明を対比的に描いたというのではなく、文明社会の「背後」により広大で、野生的な自然の存在が暗示されたのである。いわば文明社会を取り巻く基盤としての自然という、「ウォーキング」で提起された主張が反復されていたのである。

ロバート・セイヤーはこの「音」という章に関して、それは「野生に向かう瞑想の行程」（“meditative retreat to wildness” Sayre 73）であると述べ、鉄道や教会の鐘という文明社会の音までが野生的な自然のイメージで描かれていると指摘する。たしかに鉄道の音がタカのイメージで描かれ、教会の鐘の音が「森のニンフ」（*W* 123）と記述されるのだが、文明社会の基盤としての自然という観点から興味深いのは、貨物輸送について延々とカタログのように記述された部分である。上り列車には原材料が積み、下り列車には加工された商品が積載されている。そうした商品経済のしくみに想いをめぐらしながら、ソローの想像力は原材料が生産された、より野生的な自然の原風景へと広がってゆく。いわば文化の「背後にある」自然にソローの想像力は引きつけられていくのである。

たとえばメインの森から伐り出され、等級ごとに商品化された木材は「ごく最近までひとつの同じ品質で、クマやヘラジカやムースの頭上に聳えていた」（*W* 120）と記述され、スペインの皮革については「スペインの大地の草原を走り回っていた雄牛」（120）の尻尾のくせ毛が残っていると描かれている。いわばひとつの方向に文明化、商品化という流れがあり、その反対の方向に原材料を産み出す自然の原風景が広がっている。そのいずれをも否定することなく、ソローの想像力がより野生的な自然へと向けられているのである。

こうした観点からすると特に興味深いのは、活字に関する言及であり、文字の「背後」に示唆された自然と人間の原風景である。

This car-load of torn sails is more legible and interesting now than if they should be wrought into paper and printed books. Who can write so graphically the history of the storms they have weathered as these rents have

done? They are proof-sheets which need no correction. (*W* 119)

この「音」という章には明らかにエマソンの思想の影響がみられると思う。「読書」から自然という構図にしても、鉄道や流通経済を文明の進歩と位置づけている点も、エマソンの『自然』の「商品」と共通する思考である。しかしエマソンの『自然』が自然の物質的な効用である「商品」から「美」「言語」「精神」「唯心論」へ、つまりより形而上学的な方向へと段階的に秩序づけられたのにならして、ソローは歴史の進歩を否定することなく、その思考は商品から原材料へ、原材料からより野生的な自然の原風景へ、つまり文化の基盤となる自然へと下降していったのである。

ソローがボストンへ向かう貨物列車を見やりながら、上りと下りという文化の二つの方向性に注目したのは興味深い事実であった。ひとつの方角には歴史の進歩を基軸とした産業社会が展開され、もう一方の方角には広大な自然の風景が広がっている。この文化の二重性こそが『ウォールデン』というテキストを貫くテーマであったのだが、さらには「ウォーキング」において展開された合衆国の東部と西部、つまりフロンティアというアメリカ社会の物語でもあったのである。

そしてこうした二つの方向性は、「より高い法則」の冒頭に述べられたソローの内部における二つの志向性とも密接に関連していた。「私のなかには、他の多くの人と同様に、より高い、いわば精神的な生活を求める本能とともに、原始的で粗野、むしろ野蛮な生活を求めるもうひとつの本能があることを見出した。いや今もなお見出しているのだが、そのどちらも私は尊重する。善なるものと同様に野生的なものを私は愛する」(*W*210)。この二つの方向性はソローの身体観にも反映されていた。ソローは西洋の形而上学における身体と精神、あるいは肉体と魂という二律背反的な構図を排し、身体は魂の「果実」(*PJ*1: 137)であると記述する。「全たき人をつくるには、魂は身体のごとく地を離れ過ぎてはならず、身体もまた魂のようであらなければならない。一方が他方を否定したり抑圧したりしてはならないのだ」(*PJ*2: 240)。

ソローは「住んだ場所と目的」において、自分のうちには「二つの意識」があると語っていた。自らのうちにひそむ他人性に言及したものだが、自分の行動や思考を監視するこの意識の二重性は、「ソローの揺れ」

と親密に連動していたとは考えられないだろうか。文化をめぐる二つの方向性、自然と文明、身体と精神、あるいは昼と夜、意識と無意識、地上界と天上界、こうした二重性を自在に揺れ動く一つまり、消極的な意味においてブレるのではなく、より積極的な意味合いで創造的に融合させた—ソローの姿勢をわれわれは注目する必要があると思われる。そしてこのことはソローの文化論を考えるうえできわめて重要なことだったのである。

引用文献

- Borst, Raymond R. *The Thoreau Log: A Documentary Life of Henry David Thoreau 1817-1862*. New York: G. K. Hall & Co., 1992.
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. New York: Dover, 1962.
- Harding, Walter, and Carl Bode, eds. *The Correspondence of Henry David Thoreau*. New York: New York UP, 1958.
- Maynard, W. Barksdale. *Walden Pond: A History*. New York: OUP, 2004.
- Meltzer, Milton, and Walter Harding. *A Thoreau Profile*. Lincoln, MA: The Thoreau Society, 1962.
- Moldenhauer, Joseph J. and Edwin Moser, eds. *Early Essays and Miscellanies*. Princeton: Princeton UP, 1975.
- Sayer, Robert F. *Thoreau and the American Indians*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- Shanley, J. Lyndon. *The Making of Walden*. Chicago: U of Chicago P, 1957.
- Thoreau, Henry D. *The Writings of Henry D. Thoreau: Walden*. Princeton: Princeton UP, 1971.
- . *The Writings of Henry D. Thoreau: A Week on The Concord and the Merrimack Rivers*. Princeton: Princeton UP, 1980.
- . “Walking.” *Wild Apples and Other Natural History Essays*. Ed. William Rossi. Athens: U of Georgia P, 2002.
- 上岡克己『「ウォールデン」研究—全体的人間像を求めて—』旺史社、1993年。
- 高橋勤『コンコルド・エレミヤ—ソローの時代のレトリック』金星堂、2012年。